

映画化された小説

みて特集
presents

6選

6 novels that were made into movies

6 ぼくは明日、昨日のきみとデートする



著／七月 隆文

映画

ぼくは明日、昨日のきみとデートする

2016年12月公開

監督：三木孝浩
出演：福士蒼汰
小松菜奈

感想

タイトル通りのストーリー。中盤、SF的な設定も見えるが、内容は恋愛に不慣れな20歳の恋愛物語。全体的に会話中心に描かれているので、本を読み慣れていない人には読みやすいだろうが…私は稚拙に感じた。主人公は純情のオンパレード、無駄な会話を無駄に描く…という印象しか残らなかった。二人の主人公に対する描写は軽く薄く、ただ「好き」と言い合っているだけ。ベストセラー作品らしいが、ライトノベル出身の作家だと知り、色々と納得できました。

5 八日目の蟬



著／角田 光代

映画

八日目の蟬

2011年4月公開

監督：成島 出
出演：井上真央
永作博美

感想

不倫相手の、その妻との間に生まれた赤ん坊を誘拐し、3年半にわたり育てる女の話。
1章は逃亡生活。2章では誘拐された子が大学生となつてからの生活(心情)を描いている。息苦しさを感じながら読み進めた。逃亡生活は、当たり前だけど苦しい。ハラハラする。親元に戻された子も、また幸せではない毎日を過ごす。更に重苦しさを感じる。他の作品でも思ったのだが、角田光代は、あまり幸せではない女性の心情を描くのが上手い。読後は切なく苦しい余韻が残った。

4 マリアビートル



著／伊坂幸太郎

映画

ブレット・トレイン

2022年9月公開

監督：デビッド・リーチ
出演：ブラッド・ピット

感想

それぞれの登場人物の視点に立った章が代わるがわる続き、やがて新幹線「はやて」の中で彼らはつながり、物語が進んでいく。それぞれの関係性、「誰が誰と、いつ出会っていたのか」を記憶しておくこと。しかしながら、スピード感があり、どのように関わっていくのかとわくわく感があった。暗殺者や、狡猾で卑劣な少年が登場し、死体もごろごろ転がる内容なので、その手の物が苦手な方にはお勧めできない。感動はないけれど、単なる娯楽小説として読むのならアリ。

3 君の膵臓をたべたい



著／住野 よる

映画

君の膵臓をたべたい

2017年7月公開

監督：月川 翔
出演：浜辺美波
北村匠海

感想

高校生の青春・友情・病気の物語。主人公が高校生なので、会話となる部分は子どもっぽさを感じ、若さゆえの理屈っぽさも、なんとなく違和感。「ヒロインの病気」がテーマかと思いきや、青春まっただ中の子どもの心の成長がテーマかも。中高生向きの本かもしれません。だから、中高生の若い読者なら結構泣いてしまうのかもしれない。大人(中高年)が読むには物足りないと思います。ただ、価値観は人それぞれなので、興味がある方はどうぞ。

2 ある男



著／平野啓一郎

映画

ある男

2022年
11月18日公開

監督：石川慶
出演：妻夫木聡
安藤サクラ

感想

亡くなった夫は、夫が名乗っていた人物とは別人だった。「夫は何者だったのか」と、依頼した弁護士目線で物語は進んでゆく。
単なるミステリーではなかった。様々なことを考えさせられる内容だが、考えさせ過ぎる感はぬぐえない。正直、読了感はあまり良くない。これから面白くなりそうと期待したところで、必要なかと疑問を抱くエピソードで話の腰を折られる感じがあり、内容に没入できないまま欲求不満気味で終わってしまった。

1 月の満ち欠け



著／佐藤 正午

映画

月の満ち欠け

2022年12月公開

監督：廣木隆一
出演：大泉 洋
有村架純

感想

映画のCMを見て感じていたこの作品のストーリーは、妻子を事故で失った夫が知ることになる娘の秘密。そう思っていたが、小説は、そう単純ではなかった。確かに娘の秘密なのだが。
物語の柱となる〈瑠璃〉は「月の満ち欠けのように死にたい」と言った。それはあまりにも苦しく、本当にそれで良いの？と尋ねたくなる。無意味と感ずるか、純愛だと感ずるか…。
中盤は、現在と過去が交錯するので注意深く読まなければならない。2017年直木賞受賞作。